『メタリック』のパワー 加古陽

杉と田と水脈みづなという美しいものから成る名の女性国会議員が、LGBTの人たちに税金を使うことを「彼ら彼女らは子供を作らない。つまり『生産性』がないのです」と批判し、響盤を買ったのは、暑かった夏の暑苦しすぎる出来事だった。同性愛者も性転換した人も珍しくない世の中である。発言は差別的で、政治的に正しくなかったが、自らの家族の問題として考えた時、息子や娘からLGBTであることを告げられ、何の葛藤もなく受け入れる人はまだ多くないのかもしれない。LGBTの当事者も微妙な本音が分かるから、悩んだり傷ついたりする。

ゲイを自認する小佐野彈の第一歌集『メタリック』（短歌研究社）の歌には、そうした世間の空気が背景にある。全編、自らをモデルにしたとみられる性的少数者の男が主人公である。恋の相手は、男。主人公は自らの恋心に忠実だが、家族や周囲が同性への彼の恋を心から受け容れ、祝福しているとは言いがたい。主人公は奥底に世間の価値観を引きずり、葛藤する。

その心の種から生まれた詩の花が小佐野の歌であり、『メタリック』である。言うまでもなく、禁忌は文学の母である。小佐野は奥底のマイナス感情を力強く反転させ、鮮烈さと深みのある世界を作り上げた。冒頭の一首からして、印象的だ。〈家々を追はれ抱き合ふ赤鬼と青鬼だつたわれらふたりは〉。絵本で見る赤鬼も

青鬼も男である。主人公は自らを鬼に例え、同性愛を異端視する人々からの疎外感、はぐれたもの同士の恋と寄る辺なさを歌う。

続く短歌研究新人賞受賞作「無垢な日本で」にも物語性をはらんだ佳作が並ぶ。よく引用される〈ママレモン香る朝焼け性別は柑橘類としておく いまは〉。「ママレモン」という台所用洗剤の商品名は、男女のカップルが性別役割分担をしながら暮らす昭和ど真ん中の光景を想起させる。その価値観を疑わない人々に、主人公の性的志向は理解されまい。だから、問われれば「柑橘類」と煙けむりに巻く。〈擁いだきあふときあなたから匂ひ立つ雌雄それぞれわたしのものだ〉〈胸元に青いたしかな傷を持つあなたと父の墓石を洗ふ〉などとともに、ヒリヒリした感情がじわりと伝わる。

表題作「メタリック」の一連には、〈百合根のいろの大理石床〉のある心療内科に通う姿が描かれる。そんな屈託を背負いながら耽溺する恋愛である。〈ふるさとの日暮れのやうな暖色にまみれて〉伊勢丹で待ち合わせ、〈筋張つた指と指とが微かにふれて〉、〈肉は焼かれ白き煙は霧散して僕らにはもう、もうなにもない〉。そんな〈帰巢本能うしなつた鴉〉たちの〈筋書きのないことだけ〉が〈救ひだつた〉。小佐野の描く、喜びよりも痛みの強い恋の歌の数々は、同性愛者の私の胸を強く打つ。

歌集の発行は五月だが、翌月には増刷となった。夏に入っても複数のトークイベントが開かれたりして、勢いが続いている。しばしば比較される春日井建のような耽美性は感じられないが、小佐野には露悪性を含めたパワーとリアルさがある。心境に傾きすぎた最近の若い世代の歌集とは一線を画し、何よりも自らがこれを詠みたいんだという主題の力強さは特筆すべきものがある。